

平成26年度 事業報告書

学校法人 新渡戸文化学園

1. 法人の概要

・設置する学校 (平成26年5月1日現在)

(単位：人)

学 校	学科・専攻等	収容 定員	在学 者数	専任教職員数		
				教員	職員	計
新渡戸文化子ども園 (共学)		110	145	15	2	16
新渡戸文化小学校 (共学)		340	341	19		20
新渡戸文化中学校 (共学)		180	54	7	1	7
新渡戸文化高等学校 (女子)	全日制 普通科	300	121	7		8
新渡戸文化短期大学 (共学)	生活学科	160	172	22	7	29
	食物栄養専攻 児童生活専攻	100	112			
	専攻科	50	43			
	臨床検査学科	192	218	12	4	16
事務局 (給食を含む)					23	23
合 計		1,432	1,206	82	37	119

・役員および評議員 (平成26年5月1日現在)

役職名	氏 名	説 明
理 事 長	豊川 圭一	就任日 平成19年4月1日
学 園 長	森本 晴生	就任日 平成20年4月1日
常務理事	林 徹	就任日 平成23年4月1日
理 事	8 名	法人の事業に貢献4名、評議員の互選3名、短大学長1名 (理事長、学園長、常務理事を含む)
監 事	2 名	学外者2名
評 議 員	20名	教職員から4名、卒業生から2名、法人に関係ある学識経験者9名、 理事の職にある者(評議員の互選3名を除く)5名

2. 事業の概要

当該年度の事業項目	事業の目的、概要
子ども園 ・保育体制の拡充 ・保育内容の充実	<ol style="list-style-type: none"> 私学らしい独自性ある教育方針確立 (研修会等による教育力向上、英語プログラム導入等) <ul style="list-style-type: none"> 月ベースのカリキュラム見直しや週案等が充実し食育が大きな柱に成長した。 英語プログラムの導入を検討中である。質向上のため、新人指導等が急務となっている。 保護者利便性向上 (行事・面談日程の弾力的運営、1歳児保育の検討) <ul style="list-style-type: none"> 保護者係活動を保護者ではなく保護者有志へ移行し、行事はすべて土曜日へ移行した。 1歳児保育について引き続き検討している。 長時間保育児のシェアアップ及び募集人員の確保 <ul style="list-style-type: none"> 平成27年度人員予想 在籍数：148名 うち長時間：89名 (60%) 人数、長時間比率ともに向上し、応募者の質も引き続き高い状況にある。 学園連携 (小学校、アフタースクールとの教育方針連携、教員間の交流と連携) <ul style="list-style-type: none"> 小学校と内部進学に関するすり合わせを実施した、結果は12名であった。 アフタースクールとは人事交流も含め、今後さらに一体となって運営を目指す。
小学校 ・教育内容の充実 ・学園各校との連携強化	<ol style="list-style-type: none"> 私学らしい独自性ある教育方針確立 (土曜授業検討、行事の棚卸、入学考査改革、教科学習の充実等) <ul style="list-style-type: none"> 目指す子ども像を確立し、その実現のために必要な活動を精選した。 入学考査を人物中心に変更した。 学園一貫教育を意識した連携と取り組み (子ども園・アフタースクール・中高との連携強化) <ul style="list-style-type: none"> 子ども園からの内部進学方式を改善した。 教員のアフタースクールへ宿題サポートが始まった。 自己啓発・研修等による学習指導力強化を図った。 中学内部進学推進強化 (小中連携による内部進学策推進と誘導) <ul style="list-style-type: none"> 保護者会等を積極的に開催し、授業見学や説明会への誘導も強化したが、結果は3名にとどまった。 募集人員の確保 (キャリアマザー囲い込み等募集活動の強化) <ul style="list-style-type: none"> アフタースクールと連携し、外部相談会・学校説明会の内容改善を図った。 キャリアマザー支援を全面的に打ち出した。 研修による人材育成強化 (校内研修、教科研修等) <ul style="list-style-type: none"> 研修の全体計画・個人計画を作成し実行した。

<p>アフタースクール</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. プログラムの独自性強化、プログラムの質向上、高学年用向けプログラムの充実 <ul style="list-style-type: none"> ・独自性：新渡戸祭発表や大会出場を果たしたチアリーディング、中高との部活連携や出稽古が進んでいる剣道などのプログラムが順調に進んだ。 ・質向上：各学期に限らず、節目で各プログラム講師との面談を実施した他、保護者や子どもの意見を取り入れながらプログラムの質向上を図った。 ・高学年向けプログラム：12月の大会に向け特訓中のファーストレゴリーグ、女子美との連携、現役で活躍する専門家登場の衣・デザイン、プログラミングにチャレンジしているITなど内容充実を図った。ただし今年度末も参加者はいずれも10名以内に留まっている。 2. 預かりサービスの向上、保育士・幼稚園教諭資格者拡充・第2アフター室の設置、子ども園とのローテーション、研修会等によるスタッフ育成、小学校教員の活用（宿題指導の充実） <ul style="list-style-type: none"> ・有資格者（前澤）採用し、専任2名体制としたものの、年度内に1名が退職することとなったので、27年度専任3名体制構築に向け採用を進めた。 ・第2アフター室の活用も進み、子どもたちの過ごし方のバリエーションが増えた。 ・毎月1回のアルバイト含むスタッフミーティングを実施し、課題解決や意識向上に努めた。子ども園とのスタッフローテーションは来年度実施する。 ・週5回の小学校・中高教員の宿題指導実施中であり、保護者の安心感向上に加え小学校との運営一体化意識も上昇した。 3. 学園一貫教育を意識した子ども園・小・中・高との連携強化、土曜日授業等の企画（英語・理科実験等でのアフタースクール講師の活用）、内部進学につながる連携（剣道・サッカー・チアリーディング等検討） <ul style="list-style-type: none"> ・子ども園にてアフタープログラムトライアルを実施し（アート、英語など）、また、料金設定や預かり内容を検証した。 ・中高においては、部活連携（剣道部、ファーストレゴリーグ）を進めたが、ファーストレゴリーグに中高からの参加者はなかった。また、高校生のボランティア参加を受け入れた。 ・理科の授業でのアフタースクール講師の活用が実現した。土曜日においては、チアリーディングの大会前特訓など好きなこと、得意なことにさらに取り組める機会を創出した。 ・剣道での部活動連携、チアリーディングの大会出場、中高部活を意識したトップアスリート（バレーボール）の実施など、内部進学につながるコアコンテンツ充実を力を入れた。 4. 小学校募集活動との連携強化、募集パンフレット、説明会、HP等での小学校との一体化 <ul style="list-style-type: none"> ・私学セミナー、学校説明会などでのポスター、プレゼン資料等の連携、アフタースクール設置校としてのPRを実施した。 ・ホームページ、パンフレット作成においても制作に携わり小学校との一体化運営意識を高揚し、PRを推進した。
<p>中学校</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 私学らしい独自性ある教育方針確立（入学考査改革、アフタースクールとの連携等） <ul style="list-style-type: none"> ・人間学（自己発見プログラム）による人材育成、人物重視の入試を導入した。 ・クラブ活動でのアフタースクールとの連携検討会が始まった。 2. 学園一貫教育を意識した連携と取り組み（アフタースクール・小・高・短大との連携） <ul style="list-style-type: none"> ・中高教員の授業、創作舞踊、ランチデー、清掃活動および登校マナー活動など小学校との連携がより活発化した。 ・小学校授業への参加（国語・算数・理科・体育・音楽）を実施した。 ・アフターへの宿題指導と剣道へ参加した。 3. 募集活動の強化と人員確保 <ul style="list-style-type: none"> ・塾訪問活動と協力塾の囲い込みは進展した。学校説明会の増員とリピーターの確保は更なる告知努力と効果的な施策が必要である。 4. 内部進学推進強化（小・中連携による内部進学策の推進と誘導） <ul style="list-style-type: none"> ・人間学授業と説明会を実施した。6年担任団の面談による働きかけを行った。小学校との連携を強化した。進学個別相談会の実施を行ったが、内部進学者3名に終わった。 5. 共学化対応 <ul style="list-style-type: none"> ・職員会での研修と毎日のミーティングを慣習化した。生徒組織の改編を進めた。自律に向けた生活指導は共通認識の元で更に進める必要がある。 6. 教師力強化（「自己発見学習プログラム」、担任力強化、教科研修等） <ul style="list-style-type: none"> ・自己発見プログラムの研修と実施は不十分で、今後も継続する。職員会での研修は習慣化してきている。教科会において授業力強化研修は実施され今後も継続する。

<p>高校</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 私学らしい独自性ある教育方針確立（入学考査改革、アフタースクールとの連携、コース制の企画充実） <ul style="list-style-type: none"> ・志入試導入および5科型入試導入により、新たな受験者層を開拓できた。 ・高2医療系進学コースにおいて帝京病院見学を初めて実施するなど、よりコース企画を充実させた。 ・人間学の全学年実施はできたが、更なる教員研修が必要である。 2. 学園一貫教育を意識した連携と取り組み（アフタースクール・小・中・短大との連携強化） <ul style="list-style-type: none"> ・短大教員による授業が実施された。臨検学科が高2医療コースの保健を通年担当し、生活学科が高2生活デザインの3学期を担当し、生徒に短大の学びを直接経験させることができた。 ・高1生徒がアフタースクールの英語指導サポートメンバーとなった。 3. 募集活動の強化と人員確保 <ul style="list-style-type: none"> ・塾訪問を強化した。また、本校の教育を理解してくれる塾との関係強化が進んだ。 ・昨年度に比べ受験生の志が高い。相談基準を上げたことによる推薦受験生の減少分を単願と志入試によりカバーできた。ただし、併願5教科減少分を併願志入試でカバーすることができなかった。 4. 教師力強化（担任力強化、教科研修等） <ul style="list-style-type: none"> ・毎朝のミーティングにより、教員間で常に問題共有ができるようになった。 ・コーチング研修を実施した。人間学研修、塾訪問研修等を継続的に実施した。
<p>短大(共通)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 定員確保の安定化と退学者数を減少させるための指導力向上 <ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパス来校者が増加した。（食物栄養専攻 254 (+16.0%)、児童生活専攻132 (+ 9.1%)、臨検学科265 (+35%)）、受験者が増加した。（食物栄養専攻 113 (+2.7%)、児童生活専攻 62 (-1.6%)、臨）、定員の確保ができた。（食物栄養専攻 88/80、児童生活専攻 53/50臨床検査学科72/64） ・退学者の抑制、基礎学力支援（リメディアル・SLP）、個別指導による支援体制および受験生分析が必要である。 2. 体系的な就職支援強化（就職100%の維持、キャリアサポートセンター活性化等） <ul style="list-style-type: none"> ・キャリアサポートセンターによる支援強化を図った。（早期の学生面談、各種ガイダンス実施） ・就職内定が困難な学生への支援体制が課題である。 3. 「新渡戸フォリオ (manaba folio)」の活用による学習成果向上と就業力育成 <ul style="list-style-type: none"> ・新渡戸フォリオ、各種課題、実習レポート等の蓄積（インタラクティブ）、短大連絡ツールとしての有効活用（就職関係・全学掲示板）を図った。 ・学習成果向上を測定するうえでの工夫が必要である。 4. 新渡戸検定（短大編）」による本学学生としてのアイデンティティの確立 <ul style="list-style-type: none"> ・学園の歴史、建学の精神、教育理念等を理解し説明できるように新渡戸フォリオで全学生に情報の配信実施した。 ・学習成果向上を測定するうえでの工夫が必要である。 5. 新渡戸検定（学科専攻編）による教育の質保証 <ul style="list-style-type: none"> ・内容の充実と参加者の増員が課題である。 ・生活学科食物栄養専攻：調理検定1・2・3級 ・児童生活専攻：ペーパーアート・素話・手遊び・紙芝居 ・臨検学科：病理検査学 6. 学生の学習・生活環境の整備 <ul style="list-style-type: none"> ・第2カフェテリアを改装し、マルチ利用な場として整備した。 ・学習の場としての図書館利用の効果を分析する必要がある。（臨床検査学科との連携を含め） 7. 役職等組織改革による組織力強化・活性化 <ul style="list-style-type: none"> ・教学組織：27年度からの2部長制に向けて両学科委員会の統一化が必要となる。教員相互の理解と協力体制が課題となる。 ・事務組織：7月より、従来の教務課から短大事務局短大事務課に改め、指揮命令系統並びに責任所在を明確化した。

	<p>8. FD、SD活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FD活動：教務委員会が中心となり、全教員対象に実施した。今期は教務、学生生活、キャリア支援各委員会から課題を設定し（9月）、学科毎に研究会を実施した。 ・SD活動：学園事務局が中心となり、学園全事務職員対象に実施した。学園事務組織のあり方、勤務について研修を行い、事務局長による管理職研修を実施した。（業務連絡会議時） ・短大教職員全体：外部講師を招聘し実施した。今期は、力石寛夫氏による「ホスピタリティ」 <p>9. 学園一貫教育を意識した高大連携の取り組み（学内進学推進）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学園一貫教育：高大内部進学基準の見直し、短大教員による高校出前授業を実施した。 <p>10. 学科制の抜本見直し検討（答申は26年度上期中を目途）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1次答申(9/3)を経て第2次答申（10/8）提出、改組準備委員会を設置し、1月末に「食育栄養学科の事前相談」、3月に「寄附行為変更届」「教職課程認定申請書」、「子ども学科設置認可申請書」、「臨床検査学科定員増申請書」を提出したものの、取り下げ再検討となった。
短大（生活学科、専攻科）	<p>【生活学科】 子ども園・アフタースクール・小・中・高とのコラボレーションによる食育・保育等の教育実践の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内併設校等とのコラボレーションを進めた。 ・子ども園での食育トレーニング、子ども園、小学校催事へ参加を検討した。 ・アフタースクールプログラムへ参加を検討した。 <p>栄養士キャリアアップ講座の充実を図った。</p> <p>【食物栄養専攻】</p> <p>1. 栄養士実力試験に向けた指導強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養士実力認定試験対策講座結果（A判定52.7%(43.4), B判定43.1%(48.7), C判定4.2%(7.9)） ・社会に通用する質の高い栄養士育成のため、アセスメントとして実施した。 ・実力試験の結果向上が課題である。 <p>2. キャリア支援・就業力育成プランの充実と強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養士キャリアアップ講座（17回）、プロに学ぶ実習編（10回）を実施した。 ・社会で貢献できる人材育成のため、体験型学習・資格取得・プロに学ぶプログラムを推進した。 <p>3. 専門性を深める4つのコース制の内容充実（コース別カリキュラムの設置検討）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食をベースとして幅を広げるコース、様々な業種で活躍できる人材を育成する。 <p>【児童生活専攻】</p> <p>1. 徹底した個別指導による幼稚園免許取得に向けた学びのプロセスの充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別指導の徹底による資格取得の意識向上を図り、専攻科における幼教・保育90%を目指す。 <p>2. クラスホームルーム設定による指導の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任によるきめ細かな指導体制を強化した。 ・近年増加するメンタルの弱い学生に対する支援体制の強化が課題である。 <p>【専攻科児童生活専攻】</p> <p>1. コース制による保育士としての専門性強化推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6つのコースを設置し、特化した専門性の発掘と強化を図った。 ・コースの人数制限を実施した。 ・学生の意識向上が課題である。 <p>2. 子ども園での保育実践演習、行事等実施への協力による実践力の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「保育実践演習」は子ども園において1日5コマ×3日間に通常保育3日間＋行事準備1日＋行事当日1日の5日間実施した。長期間の実施が課題である。

短大（臨床検査学科）	<p>【臨床検査学科】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国家試験対策の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・過去2回の反省を基に3年生担当教員が学生全体の到達度を確認しながら進めた。 2. 合格率高水準維持のためのカリキュラム見直し（3カ年計画の最終年） <ul style="list-style-type: none"> ・国試対策授業の高出席率が、高い国試合格率を導くので、時間割を工夫して出席率を高めたが、学生本人の意識の高揚と教員力の向上が必要であった。国試結果は3名が不合格となり、合格率は95.7%であった。 3. キャリア教育の充実と一流就職先の確保 <ul style="list-style-type: none"> ・支援環境は整っており、就職先の確保は出来ているが、外部と教職員との更なる連携が必要である。 4. 特化した知識及び技術の修得（心電図読解、採血技術、医学英語等） <ul style="list-style-type: none"> ・心電図判読を実施した。 ・医学英語の受講者は7.5%にとどまった。 5. 臨床検査学科における高大一貫体制のフィージビリティースタディー <ul style="list-style-type: none"> ・本学科は受け入れ可能であり、更に高校側の支援力強化が望まれる。
子ども教育研究所	<ol style="list-style-type: none"> 1. 子ども教育研究所紀要発行 <ul style="list-style-type: none"> ・『こども教育研究紀要』（第10号）10周年記念号の発行案に関して、電子媒体として平成27年6月に発行予定である。
臨床検査研究所	<ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床検査研究所紀要発行 <ul style="list-style-type: none"> ・26年度は発刊しなかった。 2. 学科内教員の研修 <ul style="list-style-type: none"> ・臨床検査学科教員のための研修を1回開催した。
新渡戸・森本研究所	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歴史資料の収集・整理の継続 <ul style="list-style-type: none"> ・資料の一部を図書館に移動した。 2. 関連の研究機関及び資料館などとの交流 <ul style="list-style-type: none"> ・新渡戸稲造博士命日祭（盛岡市）に出席した。盛岡足先人記念館を訪問した。花巻新渡戸記念館を訪問した。新渡戸・南原シンポジウムに参加した。 3. 新渡戸・森本研究所紀要発行 <ul style="list-style-type: none"> ・学外での講演を行っている。
法人	<ol style="list-style-type: none"> 1. 各種新システム（会計・人事・給与）の安定運営 <ul style="list-style-type: none"> ・会計システムは、平成27年度からの新会計基準に対応するよう変更を加えた。給与システムは問題なく稼働した。人事システムに関しては、評価制度の最終調整を行い、年度内にカスタマイズが完了した。 2. 本部事務局マルチ体制の強化（ローテーション推進） <ul style="list-style-type: none"> ・今年度は7月に生活学科、臨検学科、事務局職員の人事異動を行った。また、10月に臨検学科職員1名を図書館に異動した。 3. 学園3ヶ年整備計画の推進（戦略案件・老朽化案件等取り組み） <ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、9月から中高給食を第1カフェテリアで提供するために第1カフェテリアの厨房設備を刷新した。また、第2カフェテリアを大幅にリニューアルした。 ・中高図書室を8号館図書館2階に移転した他、施設・設備の老朽化に機動的に対応した。

3. 平成26年度理事会等の開催状況

日時	会議
平成26年5月26日	理事会・評議員会
平成26年9月9日	理事会
平成27年1月20日	理事会
平成27年2月17日	理事会・評議員会
平成27年3月10日	理事会・評議員会

4. 財務の概要

・消費収支の推移

(単位 百万円)

	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
A. 帰属収入	1,431	2,769	1,487	1,517	1,597	1,665
B. 基本金組入額	66	0	0	64	110	161
C. 消費収入(A-B)	1,365	2,769	1,487	1,453	1,487	1,504
D. 消費支出	1,424	1,625	1,425	1,434	1,550	1,583
純資産の増減(A-D)	7	1,144	62	83	47	82